

希望の連合への出発



水俣総括会議

武藤 一羊

「人間と自然」をテーマにした水俣会議にひきつづき、ビーブルズ・ブラン二十一世紀のなかで全国各地でもよおされた一六のテーマ別、階層別の国際会議の成果をもちより、未来への展望と行動計画をまとめあげるための総括の会議が、八月二日から二四日まで同じ水俣の地でひらかれた。三一か国・地域、一五国際団体から一五三人の国外参加者、またPETA、カラワンの文化活動家一八人が参加、水俣をのぞく日本各地からは一二人の活動者が参加し、四日間、寝食と風呂をともし、濃密な時間をすごした。そしてそのなかから「水俣宣言」とその一部としての「行動提案」を生み出し、全世界にむかって発表した。

こう書くと、いかにもすんなり事がすすんだように聞こえるが、実際は未来の世界をかいまみせる解放的な局面と悪夢のような混乱とがごちゃ混ぜになったきれいだとはではない四日間であった。悪夢の面の負担は、なによ

りも、浜元さん、谷さんをはじめとする水俣の仲間たちの肩にかかった。「水俣をのぞく」とことわったのはそれをあらわすためである。八月一六日からのACFOD総会をいければ、一〇日間ちかい、受け入れ、輸送、宿泊手配、苦情処理などの昼夜をわかたぬ労働をうけもつてくださったのは、水俣の仲間たちであった。そのため水俣からの会議出席者は、五〇〜七〇人としか特定できないのである。実状は、ほとんどの仲間たちが会議にとうして出席することはできなかったのではないかと思う。この仲間たちの献身なしでは、そもそも水俣総括会議はなりたたなかつた。まずはじめにそれを記して感謝に代えたい。

水俣宣言は、「わたしたちが水俣の地に集まったのは意味がある」とのべているが、それがもつともよく実感されたのは、浜元さんの存在をつうじてだった、といって反対する者はいないだろう。会議は浜元さんの犠牲者への祈りではじまり、浜元さんの力強い閉会の挨拶でおわった。その間、会議全体に出席された浜元さんは、その存在と発言をつうじて、水俣会議に、またPP21全体に、重みと方向を与えてくださったと思う。「じゃなかしゃば」という言葉は、準備過程での「オルタナティブとはそもそも何か」という空回りしがちな論議に、内容を充填し、終止符をうつ意味があった。

もうひとつ水俣の神々しいばかりに美しい風景にいだ

かれて会議がひらかれたことも、大きい意味があったと思う。この美しかるべき自然を平然と汚し、そこに威厳をもって生きていたひとびとを平然と殺し、うちすてて省みないものたちが横行している現存の「しやば」を、それは、参加者すべての目に、写しだした。マレーシアの獄中からでたばかりの労働運動のリーダーであるアロキア・ダスは、アンケートにこう書いている。「水俣会議は多くのことについて私の見解を変えさせた。その一つは、水俣については七〇年代にすでに聞いていたけれど、問題の深刻さについて理解していなかったことだ」。ダスは、反公害とは先進国の賢況ではないか、というアジアでよく口にされた考えがまったく誤りであることを、あらためて深刻に悟ったという。

さて、会議は、第一日目に、水俣公民館で総会がおこなわれた。開会のあとコーディネーター・グループの起草した基調報告を武藤がおこなった。この報告は、東京を中心にP P 21実行委員会のオルタ委員会が討論したものを、コーディネーターの村井、ローレンス・スレンドラ、武藤が分担執筆し、それをダグラス・ラミスの助けを得ながら武藤が統一したものである。基調報告は、総括会議の五議題を提案し、さらにそれらをどのように通の土俵で相互にかかわらせるか、という角度から、「越境する参加民主主義」(transborder participato-

ry democracy)、「民衆性」(peopleness)「民衆際自治」(inter-people autonomy)などという耳なれぬ考えかたをあえてうちだした。

それに続いて、全国でひらかれたP P 21のそれぞれの会議や行動からの報告が、昼食をはさんで夕刻までびっちりおこなわれた。報告者は各会議から一人か二人。日本人の場合も、海外参加者の場合も、両方からという場合もあった。会議の数がたいへん多く、かぎられた割当時間のなかで、P P 21の全容を共有化するのは容易ではなかった。報告は、スタイルも背景も異なっていて、P P 21の全容をはじめてあきらかにするとても興味あるものだったが、報告の数の多さは「一方的に聞かされるばかりで、参加がない」という不満をとくに海外からの参加者の間にうみだした。オルタナティブな会議のもちかたが、いかにむずかしいかを痛感させられた場面であった。(各会議からの報告は、この報告書にくわしく盛られているので、ここでは省略)。

その夜、水俣湾を一望のもとにおさめる湯の尻台地でカラワンバンドの公演を中心とするすばらしい歌とダンスの交歓がなければ、水俣会議の雰囲気は違ったものになっていたかもしれない。地元バンドも出演した。食べ物、飲物も豊富に供給された。出席者全員が夜更けまで踊り、抱き合い、ロックの音響のなかでどなるように語り合い、ひとつに溶けあった。

第二日は、討論という点では、水俣会議の核心である五議題に沿った分科会が昼間一杯おこなわれた（分科会報告は別掲）。夕刻、水天荘の大広間に全員がぎっしり座りこんで、総会を開き、各分科会の報告を聴き、その場で、水俣宣言の起草委員会を選出した。

ここで、P P 21という初めての試みのなかで、討論を集約してゆくシステムがどのように予想されていたかを振り返って見よう。

第一は、もちろん、階層別、テーマ別の会議からだされるオルタナティブの提案である。しかし水俣会議ではこのような提案をただ持ち寄り、つなぎあわせるのではなくて、それをもう一度、共通議題のもとで組み直してみようという趣旨で、第三回全国実行委員会において、五項目の共通議題が提案、採択されていた。その五項目は、（一）人間と自然―破壊から共存へ、（二）抑圧からの解放―あたらしい社会と文化をつくる、（三）強者の支配をくずす―国家を変える、国際関係を変える、（四）経済をとりもどす―モノとモノの関係からひとひととの関係へ、（五）共同の未来へ―民衆のたましい、民衆の連帯、である。これらが水俣会議の分科会それぞれのテーマとなった。

P P 21第三回全国実行委員会は、これらの議題にそつてすでに、分科会にわかれて討論を開始していた。その中間報告は「オルタ資料集第二集」に採録されている。

また第三回実行委員会の第五分科会のように、その座長団がその後も連絡しあって議論を深化させてきたところもある。この段階の議題ごとの討論は、当然ながら、主として日本の現実と実践に基礎をおくものであった。この日本の現実を中心とする討論の積み重ねの上に、国際会議において、強力な外からのインプットがおこなわれたわけである。

さらに、五議題を貫くテーマとして、基調報告がつくられ、インプットされた。

水俣会議が、総括すべきインプットは、これだけ多岐にわたり、膨大なものであった。また議題ごとに煮詰まりの不均等なものであった。八月二三日朝から翌二四日朝までの限られた時間のなかで起草委員会は、この途方もない仕事をまかされた。起草委員は、カムラ・バシン（インド）、ハビエル・ゴロスタチャイガ（ニカラグア）、ジヨモ・K・スングラム（マレーシア）、ホラシオ・モラレス（フィリピン）、ロベティ・セントウイリ（非核独立太平洋運動）、エド・バインステイツク（アメリカ・インディアン）、ダグラス・ラミス（米国、在日本）、花崎皋平、松井やより、菅孝行、内海愛子、それにユイ・デイナーター三人も討議に参加した。

起草委員会は、水俣宣言の総論部分と具体的な行動計画部分の起草にあたる二つのグループにわかれて作業をおこない、さらにそれをつきあわせて一本化することに

なった。この作業は困難をきわめ、結局最終総会が開かれる二四日の午前三時までつれこんだ。もとの文章は英語であったので、アイリーン・スミスさん、ジン・イングリブスさんをはじめ多くの人々が夜をてっして通訳に協力してくださった。しらじらと夜の明けけるころ、加地永都子さんと堀川禎一さんの手で翻訳がはじめられた。

総論部分でもっとも激しい議論がおこなわれたのは「民主主義」をめぐる部分であった。アメリカ・インディアンの運動にとつて、「民主主義」とは征服者の秩序そのものであり、敵の制度以外のなにもでもない。エド・バインステイクはそれを指摘し、民主主義への肯定的評価に強く反対した。また民主主義の覆いのもとで、低強度戦争のような民衆の闘いへの敵対がおこなわれている。他方、民主主義は多くの民衆運動にとつて、闘いの目標でもある。水俣宣言は、この二面性をきつちりと書き込むことで、激論を乗り越えたばかりでなく、民主主義の内容を豊富化したといえるだろう。

行動計画部分はずっと困難であった。個別の会議までふくめると総括すべき素材が多すぎて、それらを体系化するとはお手上げの状態におちいったのである。深夜をとくに過ぎて、PP21全体を通じて「ハイライト」となった（と判断される）テーマだけを書き出すことが合意された。そして、行動計画の全体は、個別の会議をふくめてPP21のプロセス全体のなかで採択されたすべ

ての行動提起であることが、確認された。

二四日朝ふたたび水俣公民館を埋め、期待をこめて宣言案の到着を待つていた三〇〇人のもとに、水俣宣言はぎりぎり間に合つてとどけられた。そして提案され、質疑がおこなわれ、修正され、採択された。ひとびとは長い、長い、PP21のプロセスを経て、明らかに肉体的限界にきていた。しかしこころと頭脳の不思議な高揚が会場を支配していると感じられた。何かをたしかに、共同で獲得したという実感が共有されたと言つていいだろう。この高揚は、終点のものではなく出発点のものであった。

宣言採択後、ACFODのサプールは、水俣会議中に三回にわたつてひらかれた参加国際団体の相談会を代表して演説し、PP21がアジア太平洋の民衆の運動にとつて歴史的な重要性をもつとのべ、PP21の継続が国際組織の間で合意されたことを報告し、一九九二年に、次のPP21をアジアのどこかで（サプールは例えばタイでと言つた）開くことを、提唱した。

二十一世紀が始まるまえに、「ピープル」はそれを準備しはじめるのである。

（敬称略）

基調報告

希望の連合のために

武藤 一羊（全国コーディネーター）

時代の希望と精神

二〇世紀はじめのスローガンは進歩でした。二〇世紀末の叫びは生存ということです。つぎの世紀からのよびかけは希望であるでしょう。この希望につきうごかされ、またつよい危機感にうながされて、わたしたちは、この水俣の地で、ピープルス・プラン二一世紀の総括会議を開会いたします。

わたしたちが水俣に集まったのは意味のあることです。水俣は、開発の極端に殺人的で破壊的な姿を、わたしたちすべてに象徴的に示した地だからです。ボパールとチエルノバイリでもそうでしたが、ここでは、進んだ技術と生産方法を持つ巨大組織が、今日わたしたちを受け入れてくださった水俣の人びとに、恐怖と、病いと、死をもちたらし、この美しい水俣の海に、何十年も、いや何世紀かかって回復できぬかもしれぬ致命的な損害をあた

えました。この三つの災害——水俣、ボパール、チエルノバイリ——は、われわれの時代の指標ともいえます。水俣では、資本主義国家の工業が、自国の市民を汚染しました。ボパールでは、巨大な北の多国籍企業が、南の一国の民衆を殺し、汚染しました。チエルノバイリでは、社会主義政府が、自国の国土と民衆の上に、そして国境を越えて全世界に、放射能をまき散らしました。ここでこれ以上環境の危機の例を数え上げる必要はないでしょう。はつきりしていることは、どこにも隠れるところはない、ということ です。

開発の世紀である二〇世紀は、たしかに多くのよいことをもたらしましたし、わたしたちはそれを評価します。しかしわたしたちは冷静な現実主義者でもなければなりません。二〇世紀は、過去のどの時代より多くの、そしてずっと残酷な戦争をもたらしました。まえの時代には想像もつかなかったような殺りくの技術が発達しました。民衆の偉大な保護者であるはずの国家は、最大の殺人者、戦争で他国の人びとを殺すばかりでなく、先例のないほど多数の自国市民を殺すものであることがはつきりしました。世界を貧困から救い出すと期待された経済発展は、これまでのところ、発展以前の貧困を、発展した貧困に、伝統的な貧困を、世界の経済システムに適合した近代化された貧困にかえただけであることがはつきりしています。二〇世紀は、ふたつの陰惨な新語を辞書につけくわ

えました。ジェノサイドとエコサイドです。この二つの言葉を生み出した実践は、どちらも進んだ科学技術の産物です。そしてどちらもわたしたちが「進歩」や「発展」と呼んできたものの名においておこなわれました。わたしたちはいま問わなければなりません。歴史の進歩についての理解、闘いとるべき目標、希望のありかなどについて、どこかに、深く誤ったところはなかったか、と。

浜本さんは、水俣の方言に「じゃなかしゃば」という美しい言葉のあることを教えてくださいました。「いまのようでない世の中」という意味だそうです。胸のおどる言葉です。わたしたちのいまのありかた、いまわたしたちが持っているもの、運命として甘受しそうになっているものからの、飛躍、あるいは絶縁、がありうることを、それは示しているからです。そしてそれこそ、今日、われわれの目の前で、アジア太平洋の何百万の民衆が行動で示していることなのです。これらの人びとは、運命として外から押しつけられた状態を拒否し、飛躍の用意をととのえている、いや飛躍をこころみています。大波のような民衆の運動が次から次へと出現し、広がり、国境を越え、連合し、補いあい、そのなかで、新しいコミユニケーションのネットワークにたすけられながら、ますます、同時代の感覚を共有しつつあります。韓国、フィリピン、ビルマ、などの大規模な運動はすでに民衆の爆発的な力を世界に示しました。最近それに、中国民衆

の新しい、大規模な民主化運動が合流しました。こうした大きい国々でも、小さい国々でも、またどの州、県、町、村をとつても、人びとは動き始めています。これが、アジア太平洋地域を定義づける主要な力であり、またこの会議がひらかれた理由でもあります。

「じゃなかしゃば」は、今日の時代の民衆の精神であります。ですからわたしたちは、今世紀がもたらしたすべての否定的なものにもかかわらず、二一世紀は希望の世紀であると宣言することをはばからないのです。

アジア太平洋の現状

このような新しい運動は、国家の役割について特別な矛盾が現れてきた新しい状況のなかで広がっています。アジア太平洋地域はいまや多国籍資本によって組織されつつあります。多国籍資本は、遠くはなれた、異質な地域や人びとを、単一の、垂直的な分業のなかに結びつつあります。国家はこの過程の積極的な推進者となり、多国籍資本を自国の内部に導き入れる案内人の役割を果たしています。この経済の多国籍化は、同時に、国家の基礎を掘崩すように作用します。国家主権だとか、民衆の保護者だとかいう国家のたてまえがあやしくなり、正統性がうしなわれてくるからです。そこで国家は、中国

を含む「開発国家」の場合、弾圧と暴力的対応を強化します。あるいは日本の場合、国家主義的イデオロギーを民衆の心のなかにたたき込むために必死の努力をこころみます。

日本の場合、この同じプロセスのなかで、「成長のエンジン」は過熱し、手におえぬものになり、その結果、飽和経済とでもいうべきものが生まれました。日本の労働者は、年間2200時間働きます。極端に管理され、無力化された状況のなかで働きます。そして人びとの上には、広告が嵐のように襲いかかり、消費すること、ライラを解消せよと説きつけます。同時に、文字どおり、あらゆる人間活動、人間の生身の機能が、商品や商業的サービスの対象になります。髪のとかしめた、鼻のかみかた、蚊にさされたときの掻きかた、性行為の仕方まで、猛烈なマーケティングの対象にならないものはひとつもないといっているでしょう。そしてそれぞれにみあった商品やサービスが開発されます。人間生活のあらゆる側面の商品化は性の商品化を含みます。性の商品化は、巨大なセックス産業を生み出し、数十万の女性たち——そこには「輸入」された多数のアジアの女性が含まれています——が日本の男たちの疎外された性的欲望に奉仕させられています。世界でもっとも強力な経済は、その市民に力をあたえません。反対に、市民を無力化し、バラバラに分断しようとするのです。そしてこのなかで、

日本それ自体のなかに、「南」と「北」が生じます。「南」には低賃金の仕事にたずさわる数百万の女性バート、下請け労働者、日雇い労働者、そしてますます数を増す東南アジア、南アジアの出稼ぎ労働者、そして急速に周縁化されている農民などがふくまれています。ここでもまたシステムは、自分自身をほりくずしはじめます。飽和経済はあまりにも極端に走ってしまったので、ますます多くの人びとが「もうたくさんだ」と感じ、新しい生き方を模索しはじめます。

新しいアプローチ

このように激しく変わってゆく状況のなかで、わたしたちは、新しい地図を必要としています。威敵をもって一緒に生きていける社会の新しい図柄、新しいパラダイムを必要としています。

しかしそのような新しいパラダイムは、どこか遠くに探しに行かなければならないわけではありません。すでにさまざまな民衆の運動のなかに、新しいパラダイムは部分的に姿をあらわしています。空想ではありません。いくつかの運動のなかから新しい考え方が生まれているからです。

最初に、ここ二〇年ほどのアジア太平洋の民衆運動を見てみましょう。いたるところで、民衆自身がパワーを

獲得するための努力がおこなわれています。(英語で「エンパワーメント」という言葉が広く使われていますが、ひとことで言い表せる適切な日本語がみつかりません)。地域コミュニティで、エスニック集団で、女性のあいだで、労働者のなかで、都市スラムの住民のあいだで、人びとはみずからを組織し、上からおしつけられた「開発」に抵抗し、自立と自治を主張して動きはじめています。

民衆の意志が全国的に爆発する大きい闘争も、こうした小規模な「エンパワーメント」や意識化の積み重ねのなかで準備された場合が多いのです。このような努力のなかで、民衆が主権をもつ最高の存在だという考え方がはぐくまれます。このような民衆の新しい動きのなかで、多くの草の根の思想家たち——宗教者もいれば知識人もいます——が、それぞれの思想や宗教の教えのなかの解放的な要素に依拠しながら、それを、人びとの怒りや希望を表現できる新しいかたちに練り上げようとしてきました。民衆の神学や解放の神学、またさまざまな実践の哲学が、民衆のパワーへ向かう歴史的運動への創造的な応答として生み出されました。そして民衆のよりどころを再建するために、民話や伝統芸術のなかの土着の価値に新しい光があてられました。

「エンパワーメント」のための草の根の運動は、新しいかたちの民主主義をさししめしています。それは以前にはみられなかった民主主義で、その輪郭はまだはつき

り見えているわけではありません。だがたしかに言えることは、それが、国家の形態としての「民主主義」を越えたなにかであるということでしょう。いわば「現場における民主主義」、コミュニティに根ざした民主主義です。人びとが、自分たちの生活を左右することがらについて真のパワーをつくりあげるような民主主義とも言えるでしょう。

さらに先住民の運動があります。過去二〇年間に、生存と自決のための先住民の闘争が燃え上がっています。そのおかげでわたしたちは、コロンプス以来の近代文明の歴史を読みかえることができるようになりました。同時に、先住民の運動の盛り上がりは、アイヌの国土への日本の侵略の歴史をわたしたちに明かにしました。西欧に起源をもつ近代文明の歴史全体をつうじて、諸民族の征服と自然の征服が同一の過程として進行したことも明かになりました。さらに大事なことは、先住民の闘いと価値観とが、わたしたちすべてに、自然と調和して生きるための違った仕方があることを、そしてわたしたちもこの自然の一部であることを、明かにしてくれました。女性の運動とフェミニズムの思想もまた、歴史を見直し、現在を理解するために大きい貢献をしました。たとえば、政治、経済、組織、文化などについての支配的見解が、男による女の構造的な支配に深く冒されていることを明かにしました。また革命的変革をめざす社会科学

の理論が、人間の再生産という決定的な過程をほぼ無視すること、仕事や労働の概念をゆがめ、ひいては人間生活自体の重要性をつかみそこなってきたことも明かになりました。男中心の価値観は、女にたいして暴力的であるばかりでなく、自然に対しても暴力的にはたらく、という指摘もなされました。女性の運動はまた深い、魅力的な新しいオルタナティブを提示しました。男と女の調和的で平等な関係がゆきわたるよう再編成された社会は、もっと健全で、破壊性のすくない方向に発展するだろう、という見通しです。

一九七〇年代以来のエコロジー運動は、もちろん人間と環境の調和的關係という問題に直接にとりくむ運動です。この運動は、無制限の経済と技術の発展などというものが、この地球上で維持することはできぬことを明かにしました。この運動はまた、その人間・自然モデルに対応して、支配を最小限にする社会関係を構想し、部分的に実践してきました。

起源を異にするこうした新しい運動のあいだには、驚くべき一致があります。社会的、歴史的、エコロジックのアプローチが、ひとつの分脈にくみこまれていくという点での一致です。この流れの一部は欧米ではじまったものですが、これらの運動がとりにくんでいる問題それ自身は、最低生活の基盤そのものを多国籍企業とその手先によって破壊されている第三世界の周縁化された人びとの

生きるか死ぬかの問題になっているのです。

共通テーマ

明日の社会のオルタナティブなモデルを模索する手がかりとして、PP21のすべての会議に関連する5つの共通領域を設定しました。それはつぎのものです。

(1) 人間と自然——破壊から調和へ、(2) 抑圧からの解放——新しい社会と文化をつくる、(3) 強者の支配をくずす——国家をかえる、国際関係をかえる、(4) 経済をとりもどす——モノとモノの關係からひとひとの關係へ、(5) 共同の未来へ——民衆の魂、民衆の連帯。副題のほうは、それぞれの分野で、現実は何を対置したいかを示してあります。ひとつずつ、簡単に各項目を紹介します。(第五項目は全体に関連するのでこの報告の最後でのべます。)

1. 人間と自然——破壊から調和へ

今では地球上の自然の危機について否定する人はいません。大国も環境保全を語っていますし、日本政府さえもが世界の環境のために大金を提供しています。だが、だれが、なんのために自然を破壊しているのかについてなにも触れないこうした抽象的な環境保全の叫びはうつろに響きます。

われわれの文明を自然と調和するものにすることは、

困難で、かつ緊急の問題です。そこからわれわれは、ますます、新しい、オルタナティブな開発モデルの問題にゆきつきます。問題はもはやいかに効果的に自然を搾取し続けるかということではなくなっています。問題はいかにして、われわれの自然との関係を根本的に変えるかということにあります。

この分野では、まさにこの問題について、ゆたかな知識をお持ちの仲間が、この会場におられます。北海道、カナダ、サラワク、オーストラリア、アオテアロア、その他の地からこられた先住民の代表です。自然をパートナーであり、生命のみなもとと考える先住諸民族は、自然の搾取と収奪に抗議して、闘いをすすめてきました。ここでは、自然の搾取によって被害をうけるひとびとの同意なしには、また先住民族の意見をもっとも大事と考へることなしに、自然を搾取してはならないことが、最低限確認されなければなりません。

また、科学と技術が開発されてきた仕方も疑問に付されなければなりません。テクノユートピアによる解決が、政府や財界から提案されていますが、ひどい話です。まさにテクノロジーの傲慢こそが地球をこれだけ傷つけたのですから。われわれはまず明らかに有害なテクノロジーとその応用を放棄することから始めるべきでしょう。核兵器や原子力は当然そのなかに含まれます。土地を殺す農薬の使用もそうでしょう。「自然の征服」をめざす

ビッグ・テクノロジーは、それを使う労働者や農民から力を奪う傾向があります。労働者に力を与え、人間と自然の間に調和をうちたてるテクノロジーとその利用の仕方とはどういふものでしょうか。

またわれわれ人間が自然の一部であることについて明確な認識が必要です。自然を搾取の対象とみなし、自然にたいして暴力をふるうことは、人間や人間の身体にたいして同じ態度をとることを正当化するのにつながるのではないのでしょうか。

最後に、自然との調和的關係は、際限のない蓄積なしには生きられない資本主義制度の枠のなかで可能なのでしょうか。

2. 抑圧からの解放——新しい社会と文化をつくる

ここでの仕事は、支配的な垂直的統合を、一国的にも国際的にも、うちこわし、それを、個人と集団の水平的統合でおきかえることでしょう。

垂直的統合とは、社会経済的階級構造や、その他の位階的編成のことを指します。ここでは、個人や集団が、トップの人びとによって、またトップの人びとの利益のために選択された評価規準によって判断され、とり扱われるわけです。それはまた、人間社会が、豊かで強力な「北」と貧乏で抑圧された「南」に分裂している状況を指しています。ピラミッド型の編成は世界中に、政府の官僚組織、企業組織、軍隊などのなかに、根をおろして

います。社会それ自体も、地位、職業、性別、カースト、肉体的精神的能力、出身地、宗教、その他による差別によって分裂させられています。

国家を別にすれば、もつとも強力な垂直的統合の組織は企業、とくに多国籍企業でしょう。それは民衆が分裂させられている事実自体を搾取するのです。それにどう対処すればいいでしょうか。ここでもわれわれの対応は国境をこえたものでなければなりません。

このような差別的システムを克服するためには、差別をつくりだし、そこから利益をえるような社会的、制度的、経済的システムをうちこわさなければなりません。そのためには、新しい平等主義の価値が必要です。そのような平等主義の価値をうらづけるのは「なに様でもないただのひと」、あるいは「民衆性」とでもいふべきものでしょう。この問題については後にもういちど立ちかえります。こうしてわれわれはすべて、垂直的統合を、個人と民衆集団の横ならびの協力にくみかえるために力をあわせたいと思います。ここで重要なのは、この横ならびの協力は、社会の豊かさのみなもととして、多様性を重んじるということです。それに反して、垂直的統合は画一性を社会に押しつけます。

3. 強者の支配をくじく—国家をかえる、国際関係をかえる

ここでは国家と国際関係を扱います。われわれの主要

な関心はどうかやって国家を克服するかにあります。だが国家はまぎれもなく、いまだに今日の世界におけるもつとも強力な存在です。われわれはアブローチを二重化する必要があります。つまり、国家の克服という長期的目標を、たえず視野にとらえながら、同時に、国家とその政策をもつと民衆に責任を負うものに変えること、また地域の国際関係を、平和と正義にそうものに変えるために闘うことが必要です。この二重性については後にふれます。

国際情勢には世界的な流動がおこっており、この流動状況は、アジア太平洋地域に、民衆が介入できる新しいスペースをつくりだしました。この地域の政治状況ははげしく動いています—米国の力の低下、ソ連のベレストロイカとそれにとまなう対外政策の変化、経済大国への日本の上昇、米国の世界戦略の一環としての日本の軍備拡張と巨大なODA資金の散布、低強度戦争戦略による米国のフィリピンへの介入と日本による側面援助、ニージーランドの非核政策、天安門以後の中国情勢、朝鮮統一問題での対決、インドシナ問題解決への歩み、など。

このようなアジア太平洋の状況に、強者の支配を弱めるためどのように一緒に介入すべきでしょうか。そのための行動計画はどのようなものでしょうか。また優先順位はどうか。

日本については、日本国家は多国籍企業の利益のためにアジア太平洋地域を管理する強大な力になりつつあります。国内的には日本国家は、差別と支配のシステムとしての天皇制をもつ国家であり、企業の優位性に立脚する国家、「よそもの」、少数民族、女性、社会的弱者、などへの差別を内包した国家です。それはまた民衆の自立を否定する国家です。日本国家は、日本は単一民族国家であると主張し、少数民族としてのアイヌの存在をさみとめないありさまです。また日本には七〇万の韓国人、朝鮮人がずっと住んでいます。この人びと、あるいはその両親、祖父、祖母たちは、意志に反して日本に連れてこられ、苛酷な労働に従事させられた人びとです。また日本による朝鮮の植民地化の結果として日本に移り住まなければならなかった人びとです。ところが日本はこのことをつぐなうどころか、生活のすべての面で在日朝鮮人・韓国人にあからさまな差別をくわえています。沖縄ははっきりとした歴史的個性をもつ存在ですが、いまや事実上日本の国内植民地としてあつかわれています。こうしたことは、戦後日本国家が、明治期以来、アジアの隣人たちと内部の少数者にたいして日本が犯してきた犯罪を本当の意味では一度も認めたことがないことと結びついていきます。これらの不正義に対決し、それを正さなければなりません。

日本のわれわれは、日本国家というものを越えるため

努力する必要があります。そして、最終的には内側からこの日本国家を克服し、この列島に生きる諸民族の連合をつくり、そのなかで隣人たちとともに生きることできる民衆として自己を確立することをめざしたいと思います。

4・経済をとりもどす——モノとモノの関係から人と人の関係へ

今日の世界経済は、南の何十億の人びとを、飢えと栄養不良につなぎとめ、土地のない状態におき、貧困を永続させ、あるいは過労を強いることによって、はじめて生き残れるような経済です。どうしてそのような経済をつくりなおせるでしょうか。

この課題を解くことはたしかに難しいでしょう。しかし、現在ののような状態をいつまでも続けることができないことは明白です。GNPで測られる経済成長を無限に続けなければ維持できないような経済は、まもなく地球の有限な許容能力の壁にぶつかるでしょう。また、民衆の力が高まっている歴史的時期において、このような経済をいつまでもつづけることは難しいでしょう。南の多数者が不平等の継続を永久に我慢するはずはないからです。日本のわれわれは、これ以上GNPをふやすことを拒否すべきだと思います。経済活動を減速し、日本産業のちっとも「進んだ」部門ではむしろ生産性や効率を下げるべきでしょう。もしそんなことをすれば大変なこと

になる、というなら、システムのほうがおかしいのです。基本的なことから考えなおすことが重要です。まともな暮らしのためには何が必要か、必要なものがどのような生産され、分配され、消費されなければならないか、ということです。付加価値やGNPで経済活動を測ることをやめて、人間的な仕方での必要を満たすことを尺度にすべきでしょう。

経済活動は、民衆の生活ーコミュニティにおける民衆の生活ーにふたたび一体化されなければなりません。生産や消費はコミュニティの物質的側面として組織されなければなりません。それを基礎にして、コミュニティが水平に、横ならびにつながりあい、余剰を交換します。これはかつかつの自給自足経済のイメージではないし、前近代的生活にもどろろというよびかけでもありません。むしろそれは、新しい豊かさ、草の根における民衆自身による蓄積によって可能になる豊かさ、をそなえた経済のイメージです。

ここで、対抗的経済システムの役割を検討してみる必要があります。有機農業を消費者に直結する運動から、労働者生産コレクティブ、民衆貿易、水牛銀行、民衆の信用組合にいたるまで、対抗的システムの運動がさまざまな形でひろがっています。こうした民衆の対抗的経済システムは、どこまで、またいかにすれば、将来のわれわれの経済システムの基礎たりうるのでしょうか。

もうひとつの主要な問題は、農業と工業、農村と都市の関係をどうして変えてゆくかということでしょう。富と権力の集中はまた、東京、ソウル、バンコク、上海のような巨大な都市中心への人口の集中をひきおこします。われわれが思い描く権力と富の分散によって、病的にくれあがった巨大都市の人口を、多少とも円滑に分散させることができるでしょうか。

越境する参加民主主義

以上で、どのようなオルタナティブな発展モデルを考えているか、簡単にスケッチしてみました。しかしこれはユートピアではないでしょうか。

前にも述べたように、オルタナティブな発展モデルはユートピアではありません。それは現実に根ざしています。今日の世界の現実に、また民衆の生活の現実に、さらに重要なことは、今日の民衆運動の現実にそれは根ざしています。とはいえ、民衆の力量が高まっているからといって、ある日、目をさますと新しい世界のなかには、世界に到達するためには、そのための真剣な探求が必要です。今日の民衆運動のなかに、世界の新たな現実を体現している側面、また特に、解放された未来を指し示している側面を発見し、それらをつなぎあわせ、われわれ

の望む二一世紀へと関連させなければなりません。つまりわれわれは未来への橋を必要としているのです。

そのような橋のひとつとして、ひとつの新しい政治的権利と政治的行動を提唱したいと思えます。かりにそれを「越境する参加民主主義」と呼ぶことにします。われわれはこれを、抑圧的勢力が今日の時代にのみあげた独特の編成、すなわち国家に援護された資本の世界化、に正面から向き合い、對抗する民衆のオルタナティブ、對抗システムとして提起いたします。

越境する参加民主主義は、目標を指すとともにそこにいたる過程をも指します。目標としてはそれは世界の民衆全体がつくりあげる世界的民主主義です。それは、世界政府とか世界連邦という既製の考えとははつきり区別されます。こうした考えは、やはり国家を構成単位として前提しているからです。とはいえ、目標としての越境する参加民主主義は、まだ遠い未来のビジョンであるにすぎません。

政治的プロセスとしては、越境する参加民主主義はふたつの側面をもっています。第一に、それは世界化する資本の権力編成を批判し、それと対決し、それに介入し、それを変えてゆく実践的方法であります。この意味において、それは、今日の社会・経済的現実と、民衆運動の論理と必要に対応するある種の行動の形式をあらわします。第二に、越境する政治行動において、民衆の集団や

組織はしだいに国境を越えたいくつもの連合を形成し、最終的には「国境を越えたひとつの民衆」となり、それによって南と北への世界の分裂を克服することをめざすものです。

今日のアジア太平洋地域における支配的傾向は、国家によって援護される資本の世界化であると申しました。それがどんな破壊的結果をまねいているかにも触れました。ここでの問題は、このようなシステムのもとでは、何百万もの人びとの生活に影響をあたえる重大な決定が、その人びとの国の外部で、当事者が知らないうちに、また当事者には何の相談もなく、下されるところにあります。国内で決定が下される場合も、その決定は、影響をうけるコミュニティーの外部で、都市の権力中枢部で下されます。重大決定の大部分は中枢部諸国で、中枢部の政府、多国籍企業、あるいはIMFや世界銀行、大国によるサミット、国際的な企業家の組織などによって、下されています。

国際的な不平等の拡大をただすうえで、国家が高い期待を集めていた時期がありました。一九五〇年代にはバンドン精神の時代でした。新興独立国家の連合と輸入代替工業化計画が、民衆の期待を満足させてくれるだろうと考えられていました。一九七〇年代には、新国際経済秩序(NIEO)の旗をかかげたUNCTADが、世界の富を世界の多数者のために再分配する効果的な働きを

しているように見えました。そのどちらも失敗におわりました。民衆の護民官としての國家という幻想は、前述したように、中国をふくむ第三世界の諸國家が多国籍企業の論理の推進者の立場に決定的に移行し、資本の世界化の国内への媒介者となるにつれて、消えていきました。

このような状況は、民衆の新しい権利の宣言を要求しています。民衆の生活に深刻な影響をあたえる決定については、それがどこでおこなわれようと、その決定に介入し、それを変更させ、制約を加え、そして最終的にはそれを統制するという民衆の権利です。これは国境をはじめとする境界を認めぬ普遍的な権利として確立されなければなりません。つまり、民衆の行動はもはや自国の領土内に限定されることもないし、また民衆は自国の國家構造を通じてだけ行動するという制約もない、ということです。越境する参加民主主義は、國家ではなく民衆が、世界政治と經濟の方向を決定するうえでの主要な主体となりうるという新しい原理です。ここでの「民衆」とは、第一に、外部の決定によって影響をうける人びとです。しかし越境する参加民主主義はそれを越えたものです。それは、国境を越えて民衆が連合し、主要な行動主体として登場することをうながすからです。

たとえば東京にある巨大出版社が、競争上の利益を確保するために、新しい、ぜいたくな、役にもたぬ雑誌を創刊し、数百万部も印刷するという決定を下すとしま

しょう。この決定は日本のバルブ需要をさらに高めるでしょう。それはサラワクの熱帯林やバブアニューギニアのマンガローブ林の伐採速度をはやめ、住民の生活基盤を破壊するでしょう。このような決定にたいしては、住民たちは、その決定が自分の村でおこなわれた場合とまったく同じ権利をもって、介入することができなければなりません。どこで、どのような機関が決定しようともそれは関係ないのです。人びとの生活がその決定によって深刻な影響を受けるといことが問題なのです。自分たちを破壊する決定にたいしては、それがどこでおこなわれようと、だれによって採択されようと、民衆にはそれに反対の声をあげ、直接に反対の行動をとる民主主義的な自然権があり、私有財産権も、國家主権の権利も、したがって國際機關の條約による権利も、この民衆の自然権に優越することはできない、とわれわれは宣言します。

熱帯林の人びとによる直接の介入は、被害をうける人びとをまもる方法であるだけではありません。それは日本にも重要な影響をもたらします。日本国内にも、民衆を愚ろうするメッセージをもちこんだ雑誌のためにべらぼうな量の紙を浪費するのはどうか、と疑いをもつ人びとがいるでしょう。いやその雑誌のために働いている人びとのなかにも、こんなくだらない製品をつくるために大事な一生をささげることにはうんざりし、絶望している

人がいるにちがいありません。もしそうした人びとが、日本の出版業が、遠くはなれた人びとの生活にどんなひどい影響をあたえているのかを、直接に知ることができれば、「出版業」というものを新しい目で見はじめるときかけができます。そして、それは被害をうけている人びとと一緒に抗議し、介入する運動に参加するきっかけになるかもしれません。

越境する参加民主主義は、国境を越えた民衆の連合に導くのです。そして最終的には国境のないひとつの「民衆」の形成をめざします。とくにこのプロセスが、北の「中枢」諸国において民衆の形成に影響を与えることが期待されます。たとえば日本では、このプロセスにくわわる人びとは、日本の国益——これは多くの場合日本企業の利益とほぼ同義ですが——と一体と考えられている限りでの「日本人」というアイデンティティーから一歩距離を置くようになるでしょう。もう何年もまえから、日本の運動のなかでは、われわれはあまりにも生産しすぎる、消費しすぎる、浪費しすぎることが議論されてきました。原則としてわれわれは生活水準を下げるために闘わなければならないけれど、そういう路線は政治的には自殺行為になる、という議論もありました。この種の議論は抽象的でした。良心のよましさを反映したものでした。一般的で抽象的な生活水準の引き下げが問題なのではなく、大事なことは、隣人たちと共存できる

ためには日本をどのように変えるのかを具体的につきとめることでした。隣人たちが、東京でくだされた自分たちの生活に影響をあたえる決定に参加する正当な権利を要求しはじめるとき、はじめて、「どのように変えるべきか」が、われわれにはつきりしてくるのです。このような要求を新しいパラダイムのもとでうけとめ、行動することによって、われわれは、南と北のギャップをますます狭め、そして最終的には克服することを見通すことができるのではないのでしょうか。

越境する参加民主主義は、独占体の排他的決定過程への参加を意味するものではありません。それは、御用組合の経営参加のようなものではありません。その反対に、越境する参加民主主義は、決定過程の排他性を廃止することをめざすものです。

日本の自動車産業を考えて見ましょう。日本では年間一二〇〇万台の自動車を造っています。これはどんな基準にたしても多すぎます。しかし企業の重役以外のだれも、決定に参加することはできません。猛烈な企業間競争に勝ち残るために、企業はますます生産をふやします。ところであれわれの考えでは、日本車に影響され、関心のある国内外の人びと——自動車企業の本工労働者ばかりでなく、下請けの労働者、海外の組立て工場の労働者、ユーザー、都市住民、その他過剰なモーターゼーションの影響をうけているさまざまな人びと——は、自

動車企業が、どんな車を、何台、何のためにつくるのか、またどんなやりかたで、どんな広告をつかってそれを売るのが、について、自己を主張できるわけです。トヨタやニッサンがそのような状況に置かれたと考えてみましょう。もはや、利潤のためだけに生産することはできなくなるでしょう。生産の目的は変わらざるをえません。どうしてももっと公衆に責任を負う方向にいかざるをえなくなります。そうすれば、利潤目的の生産という生産の性格自身が構造的に変わっていかざるをえないでしょう。

くりかえしますが、このようなことはユーロピアの図ではありません。ここに単純化してのべたようなことは、すでに世界に存在する傾向のなかから育ってきているのです。何年もまえから、「人権には国境がない」、「人権問題では内政干渉はありえない」ということが、広く受け入れられています。昨年ベルリンでIMFと世界銀行の総会が開かれ、政府代表が第三世界の債務問題での駆け引きをおこなったとき、全世界からおびただしい人びとがベルリンにあつまり、金持ち国に有利な解決を押しつけることに反対して、会議に介入をころみしました。また数年前、日本政府が、核廃棄物の太平洋への投棄計画を発表したとき、太平洋の島々の人びとは、強力な代表団を東京に派遣し、日本の運動と協力しながら、この計画を葬りました。越境する参加民主主義はこのように

して始まります。つまり運動として始まるのです。共同の行動を経験することで、われわれは新しい普遍的文脈のなかに置かれます。そして、その文脈のなかで、ひとつひとつの行動は新しい意味と方向を獲得するのです。

短い見通しと長い見通しのあいだの対話

ここでは短期的見通しと長期的見通しを混同してはならないでしょう。多くのアジア太平洋の国々には、民族的な、民族的な国家を獲得することが民衆の当面の課題です。国土と民族の分断を永続化する大国の干渉からの自由をもとめ、民族的統一をめざす朝鮮半島の民衆のすばらしい闘いはその例です。フィリピン民衆の闘いは、民衆に責任を負える民族的、民主的政府をうちたてることをめざしています。太平洋の多くの島では、外国勢力が植民地主義的な目的のために、あるいは戦略上の必要のために民衆を支配しています。ここでは民衆自身の国家を樹立することを通じて独立を獲得することがもっとも重要な課題です。そして大部分の第三世界国家が、巨大な中枢部資本の利益を自国の支配層の利益に結びつける媒介者の立場に墮落してしまった今、国家を「内部化」し、外部の支配的な力にたいする防壁に変えるために努力をこらさなければならないことが重要です。この意味において、民衆に顔を向けた国家が新たな国際的連合を復活することが

できるなら、それは民衆にとつての可能性を拡大することになるでしょう。

すこし文脈は違いますが、中枢部諸国の民衆にとつても、国家の政策を変えさせ、改良することは大事な意味をもちます。日本では、国内政策はもとより、米国の軍事戦略への加担や、ODA政策や、アジア太平洋地域への基本的態度などの領域で、国家の政策を大幅に変えることが求められています。すでに述べたように、戦後日本国家は、明治以来の日本帝国が近隣諸国にたいして行った行為を一度もはつきりと否定していませんから、日本の民衆が、民族的傲慢の歴史の徹底的な総括のうえに立つ明確な一連の原則をうちたて、日本国家にそれを守らせることはきわめて重要です。

こうした闘いはきわめて重要ですが、それを長期的見通しから切り離してはならないでしょう。アジア太平洋地域がおそろしいほど緊密に統合されつつある現在、われわれはもはや、国別の解決がそれ自身で成り立つと、何十年か前のように、期待するわけにはいかないのです。この時代は、国境を越えた解決を要求しています。そして国境を越えた解決をもたらさうるのは国境を越えた民衆の参加しかないので、すなわち、短期的見通しと長期的見通しのあいだに、たえまない相互作用、あるいは対話がおこなわれなければなりません。歴史のいろいろな位相がだぶつて存在しています。植民地主義にたいし

ては、民衆はみずからの民族国家を樹立するために闘います。開発独裁にたいしては、民衆は民衆に責任をおえる民主主義を要求します。国家に支えられた世界化した資本にたいしては、民衆は国家を周縁化しながら、それがどこにあるかと資本と権力の中枢に直接に攻勢をかけます。こう言うことは、民衆運動を進んだ運動とあまり進んでいない運動に分類するといったことではまったくありません。越境する参加民主主義とは、われわれがこれらすべての闘いに一緒に参加することを意味するので、もし、夢と現実のあいだの対話を、ここで始めることができれば、われわれはすでに、民衆の未来を形成する一歩を踏みだしたことになるでしょう。

民衆のたましいと民衆際自治

越境する民主主義のカギは民衆です。だが「民衆」(ピーブル)とは何でしょうか。ここでも意地の悪いさやきが聞こえます。民衆をまつりあげて神様にするつもりかね、と。説明が必要です。

この種の議論で通例なように、民衆とは、抑圧され、搾取され、操作されている大衆であると定義することから始めましょう。それはそれでいいのですが、そうであっても、そういう「民衆一般」は存在しないのです。民衆は、それぞれのアイデンティティをもつ多数の集団に

分割されています。性別、エスニックな違い、宗教の違い、地理的な分割、文化の違い、階級の違い、また民族国家による分割、などです。これらの集団は部分的にかさなり、個人はいくつもの集団に属しています。だが今日、こうした人間集団は、外から押しつけられた条件のもとで、ますます共に生きることを余儀なくされています。国家のあとおしをうけた世界化する資本がこうした人間集団をすべて、位階的な国際分業のシステムのなかに組織しつつあります。このような新しい秩序は、相互依存の世界という美名で呼ばれています。たしかに相互依存ではありません。だがそれは、民衆の上に強制された相互依存、敵対と分裂に浸透された相互依存です。支配的システムは、内部的分裂を恒久化し、民衆のある集団を他の集団にけしかけることで、いつまでも自分を維持することができるのです。民族排外主義、宗教的原理主義、あやつられたコミュニズム、文化的排他主義、男性優位主義、その他、山ほどの人種的偏見などがありますが、これらはすべて支配エリートが、内部的一体化をなしとげられぬ大組織をつくりあげるさいに、たいへん都合よくはたらくわけです。

民衆の闘いは、この地形の上で、この分断的構造のなかで、開始されます。最初から、全面的に開花した世界民衆の闘いとして始まるわけではありません。闘いは、それぞれの集団のアイデンティティーに根をおろして始

まり、集団の尊厳と直接の利益を主張します。あるいは、個別課題をめぐる運動として始まります。

こうした闘いは、どれも解放の種をやどしています。だがその種が発芽するためには、運動は、他の運動や闘いと出会い、反応しあうことが必要です。もし日本の労働者の運動が、非合法的な滞在資格のため安い賃金で働かされているアジアからの出稼ぎ労働者を、自分たちへの脅威としかみなさず、彼らの労働条件それ自体に何の関心も示さないとすれば、その運動は民衆の運動とは言えません。運動は、相互敵対を恒久化している分断構造の境界の内部で動いているにすぎないからです。行動がどれほど戦闘的であっても、その場合解放の種子は汚染され、ついには死ぬでしょう。

すべての運動はこのような分断された構造の内部で始まります。ということは、それを越えていく道を切り開くこと、この分断的構造自身をうちこわすこと、が必要だということになります。そしてこの構造を、民衆自身が選びとり、つくりあげる自発的な連合でおきかえる必要があるということになります。この過程において、運動は囚われの身から自由になります。経験が示すところでは、他の運動との相互作用によって運動は自分自身を変革してゆきます。それは運動の狭さを克服し、運動内部に抑圧的關係があれば、それをも克服するたすけになります。

この相互作用のプロセスのなかで、かつてサビエル・ゴロステイアーガが「多数者の論理」と呼んだものがガイドラインにならないでしょう。「多数者」とはここでは世界的多数者、つまりもつとも抑圧されている人びとを意味します。この多数者のほうが、優先権を持ちます。二〇世紀の世界の位階制度のもとでは、どの階層も、その直接の上位階層にたいして主張すべき自己の利益をもつと同時に、そのすぐ下位の階層から守るべき利害をもつています。もし、下位の階層が上位に譲歩すべきだとすれば、それは現存の秩序を強めるだけでしょう。下位にたいして譲歩するのは上位の役割です。そして二一世紀の新しい倫理は、このような譲歩を、尊厳さにおける損失ではなく、尊厳さの獲得と見るような倫理であるに違いありません。

このようにして形成される連合、それを「希望の連合」と呼びたいと思います。だがそれは可能でしょうか。それを可能にするものを「民衆性」(populeness)と呼びたいと思います。

民衆性は、民衆が闘争において自分の生命を危険にさらすような状況でもつとも劇的に表にでます。人びとが街頭に押し出し、警察と闘い、危険に身をさらし、おたがいに助けあうとき、民衆のたましいは目に見えるものになります。ランゲンでも、ソウルでも、光州でも、マニラでも、北京でも、バンコクでも、そして東京でさ

え、そのようなことは起こりました。男も女も、若いも若きも、催涙弾の濃霧のなかでおそらく始めて出会った人びとが、おたがいを同志だとうけとります。だれかが倒れば、銃撃をおかして助けます。そこには自然に生まれる平等感と共感があります。人びとは目先の利害を越えてしまいます。強い人間的きずなが生まれ、人びとは信じられないほどの自己犠牲をはらいます。

だが「民衆性」のこのような極限的表現を、日常生活のなかにあるその根っこから切り離すことはできません。そこでは、われわれはすべて、ほんとうに大事なことがらについて、似たような存在なのです。だれもが、たよりない赤ん坊として生まれ、生きるべき人生をもち、だれもが死に直面します。特権をもちている人がいるかもしれませんが、それでもその特権は、こうした人間存在の根本から、つまり生きていくことのほらむ危険にたえずさらされているということから、まぬがれさせてくれるほどの特権ではないのです。われわれはすべて、食べ、排せつし、眠り、愛し、多くのものは子供を生み、育てます。憎み、祝い、楽しみ、働き、人生を考え、動揺し、泣き、病気になる、自分の文化で表現し、老い、そして尊厳とやすらぎのなかに死ぬことに備えます。人間の存在のこうした単純な側面はわれわれすべてに共通です。そしてそのことが、共感と平等のなかで他人と関係する基礎をあたえてくれます。だがしばしば、この単

純な民衆性は、何世紀にもわたる支配と抑圧の関係によってわれわれから隠されています。あるいは、今世紀をとれば、それは、お金への物神崇拜、上昇への野心、商品へのどん欲、権力への渴望、などによって塗り込められています。あまりにも深く塗り込められた場合は、この単純な「なにさま」でもない人間のありよう、つまり民衆性は、失われ、それとともに、他の人びとと関係する能力も失われます。今日の日本社会は、この能力が、病理学的な程度にまで衰弱した社会だといえるでしょう。だが「モノ」の崇拜が重荷だとすれば、民衆性の回復は解放への道となるでしょう。

民衆性とは頭のなかで勝手にこしらえたものではありません。それは現に、一見たいへん違った人間集団のあいだに連帯の運動が存在するということのなかに、すでに働いています。それはまた、ほかの民衆の闘いへの真の共感の背後に存在するものでもあります。さらに、いたるところで、民衆の大義のためにはらわれている犠牲の背後に働いているものです。民衆性の働きを否定することは、こうした運動の現実性を否定することになります。あるいはこうした運動をまったく理解できなくなることを意味します。民衆性とはわれわれの根源的な平等性、また平等な根源性をあらわすものなのです。

この民衆性に訴えることで、われわれは、民衆諸集団のあいだのウチゲバ的紛争を克服することを期待でき、

越境する参加民主主義の主体としての世界的民衆の形成を想像できるのです。世界的民衆の形成は、働きかけ、働きかけられるダイナミックな相互作用の過程であって、儀式ばった雰囲気のみで何か協定に調印するといったことはまったく違ったことです。

こうして民衆諸集団が自発的に、自分自身で、おたがいの関係をとりしきり始め、強制された相互関係のシステムをうちこわすとき、われわれは、国家の壁を越え、国家間システムにとってかわる民衆際自治をもつことになるでしょう。民衆際自治は、おのおのの豊かな多様性を発展させながら相互に協力しあう世界の民衆そのものとなるでしょう。

ですから、民衆際自治とは、数十億のひとびとのことからです。そしてその意味ではそれはまだ二一世紀の漠たるビジョンです。だがただひとつ確かなことは、数十億の人びとの「希望の連合」をもたらすためには、それに先立って、数万、数十万の人びとの「希望の連合」、運動際自治にもとづく連合が、つくられなければならぬ、ということなのです。それは、違った関心と背景をもつさまざまな民衆の運動が出会い、相互の民衆性を確認しあい、ダイナミックな相互作用にはいる場であり、ネットワークです。その場をつくるのが、一九八九年日本でおこなわれる「ブルーブルズ・プラン二一世紀」の獲得目標です。ともにこの仕事にとりかかりましょう。

第一分科会報告

人間と自然

—破壊から調和へ—

中村尚司

多様な環境問題の根源

この分科会ではモデレーターの仕事が、キューバから来日したイスラエル・パウチスタさんと私とに割り当てられた。引き受けたものの、モデレーターが日本語でどういう意味か、この集会における役割はなにか、私にはあまり判然としていなかった。しかし、多くの参加者が発言したくとうずうずしていた状況は、前日までのロビーや廊下などでの雑談から十分すぎるほどよくわかってきた。二人で打ち合せをして、出来るだけ多くの出席者から、この主題に関する分野で重要と思われる問題を手短かに出してもらうことにした。

とはいえ、あれもこれも話したいと願って水俣に馳せ参じた五十人を越える人々に発題してもらうことは、容易な仕事ではない。いくにんかの発言者に対して私がコメントしていると、ただちに紙片が手もとに届いた。見

ると「モデレーターのコメントで時間を無駄にせず、会場にいる私たちの発言の時間に回してほしい」と記されている。その紙片は、もう聴き飽きたから今度は話したいという悲鳴を伝えているように感じられた。

会議の冒頭に、みんなで話し合いたいといって出された問題を私のメモから拾うと次のようである。

* 女性を持つ病を癒す力

* 工業開発による人間存在そのものの破壊

* 社会の軍事化による環境破壊の進行

* 有機農業の積極的な意義

* 国境を越えて進む環境破壊への対応策

* アイヌ語に自然ということばが存在しないことの意味

* ポパール事件等の超国籍企業による被害者の救済

* 共有地の減少が環境に及ぼす影響

* ネパールのような内陸国の経済封鎖が引起す森林破壊

* 食料供給源としての森林の活用

* 鉄道の枕木用に伐採される木材資源の代替財

私のメモは不完全であるが、ここに拾い上げた問題群を一瞥しただけでも実に多様な領域に跨がっていることが理解できよう。みんなが気持ちを鎮め、冷静になって共通の課題に絞ってゆけるように、パウチスタさんの発案で、カムラ・バシンさんにインドの歌をうたってもらうことになった。彼女のアジテーションが数々の集会で聴衆を魅了する力は、インドのNGO関係者の間で伝説

化するくらい定評がある。しかし、カムラさんの美声も出席者の訴えたい呼び掛けたいという意欲を削ぐことは出来なかった。

IMF、IBRD、ADB、ITTO等の国際機関が現地政府とともに、環境破壊や熱帯雨林の乱伐に手を貸し、民衆の抑圧を行なっているブラジルやフィリピンの事例が報告された。第三世界の軍事政権が民衆を無視して、超国籍企業のために天然資源の乱獲を行なっているので、地域住民による民主化闘争で対抗しようという呼び掛けがなされた。タイの参加者たちから、マンガロープの沼地が破壊され、輸出用エビの養殖池に姿を代えている事実が語られた。宇井純さんが三〇年にわたる水俣での公害闘争を振り返って、代案の必要を説き、もし代案が提示できなければ「ほっといてもらう」闘いを組織すべきであろうと強調した。そのような闘いの一環として、GATT年次総会、世界現行年次総会、日本政府主催の国際環境会議などに対抗する民衆の会議を準備しようという提案が、他の参加者から補完された。

このような発言ごも行なわれた中で、第一分科会の出席者に最も強い衝撃を与えたのは、カムラさんの雄弁であった。利潤極大化をめざす先進工業国から「経済開発」という名の巨像がやってくる。この巨像が第三世界の資源を食いつぶし、弱小動物を踏みつぶし、いたるところに糞尿を撒き散らしている。私たちの運動は、

巨大な象が垂れ流す糞尿のあと始末だけに追われていてよいのだろうか、この象を倒すことを考えなくてもよいのだろうか、という熱烈なアツビルである。彼女のアジテーションは、彼女のうたうフォークソングよりも強力であった。このアツビルを受けて多くの人々が発言を求めた。

バウチスタさんと相談して、より多くの参加者が具体的提案を行なえるように、第一分科会がさらに次の三つの小分科会に分かれて議論を続けることに決めた。

- 1、工業化による人間と環境の破壊
- 2、「経済開発」に対抗する運動
- 3、第三世界の軍事化に伴う諸運動

しかしながら、三番目の小分科会に加わった人は数名にすぎず、若干の意見交換の後、1と2のグループに吸収されてしまった。人間と自然という主題からやや離れすぎたテーマだったからでもあろう。ラテン・アメリカの現実を意識しすぎたグループ分けになったことをあとでバウチスタさんと反省した。

二一世紀への提案と展望

第一分科会内の小分科会でどのような問題が話し合われたかをくわしく報告する余裕がないので、ここでは討

議の結果としてまとめられた具体的な提案だけを紹介することにする。これらの提案には、実に多様な内容が込められていて、単に項目を掲げるだけでは誤解を招く恐れもある。しかし、出席者の熱意の片鱗を了解してもらうには、二一世紀に向けた多方面にわたる課題の一覧を列記するのが最善であるように思われるのである。

* 民衆の計画は何よりもまず判りやすい言葉で語ろう。

* 諸国際機関に私たちの声を伝えよう。

* 貨幣循環よりも物質循環を大切にしよう。

* 日本に熱帯からの木材輸入を止めさせよう。

* 公害被害者の自立のためのネット・ワークを作ろう。

* 工業化は生存に必要な範囲に止めよう。

* 科学・技術のアセスメントを始めよう。

* 科学工業国からの観光客への課税を強化しよう。

* 有機農法を発展させよう。

* 男と女の自然な関係を作り出そう。

* 異文化間の交流と協力に非言語手段を活用しよう。

* 放射性廃棄物の移動を禁止しよう。

* 熱帯雨林を活かした生産活動を大切にしよう。

* 農業による環境破壊を抑制しよう。

* 第三世界の軍事化に歯止めをかけよう。

* 先住民の承認なしには一切の開発を許さない。

参加者の全員が、これらの提案に合意したわけではない。しかし、非常に多くの賛同を得てまとめられたもの

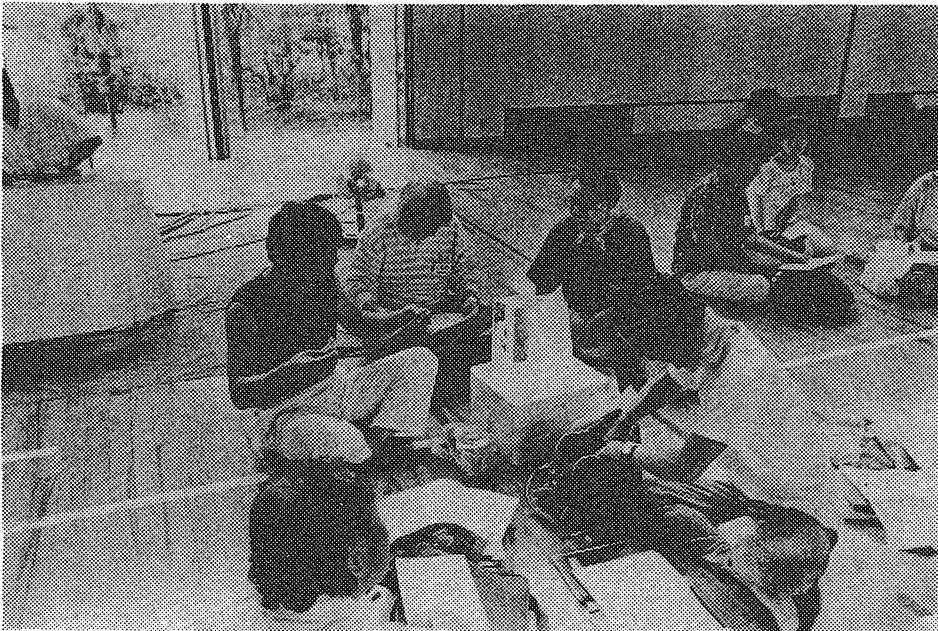
である。明日からでも取り組める課題もあれば、きわめて長年月を要する課題もある。現実的な活動を始める前に、どのような順序ですすめるか慎重に考えなければならぬ提案もある。

いうまでもなく、水俣集会のひとつの分科会の討議から生まれた提案が、そのままアジアの民衆の行動の指針になるわけでもない。これらの提案群を読むことを通じて、二二日の分科会活動がいかに熱気に満ちたものであったか、感じとっていただければよいのである。

提案をまとめるにあたって、繰り返し強調された事柄に、個々の地域的な課題を他の地域の課題といかに結びつける、という難問がある。運動をより広域に拡げらうえでの、連合組織の作り方、前世快適な課題に取り込む場合のネットワークの作り方に関心が集まっていた。とくに、開発による産業公害の犠牲者相互のネットワーク、公害の原因を解明し、患者の救済に従事する人々のネットワークを作るために、何よりも現実的な課題であるとみなされた。

熱い討論の渦に巻き込まれたモデレーターの役割を終えて気づいた大切な点は、分科会参加者の大半に共通した自然に対する構え方である。ほとんどの発言者が人間を自然に対立させるのではなく、人間が自然の一部にすぎないという立場から議論を始めていた。取り立ててその前提を確認したうえで論旨を展開するというのではな

く、声高にいわなくても当然の視点であると了解されていた。このような共通の自然観が、同時通訳を不可能にするほどの激論や混乱にもかかわらず、私たちの分科会の討論をさわやかなものにしてくれた。アジア太平洋地域からの参加者が中心であったこと、とりわけ先住民の経験から学ぼうという姿勢が獲得されていたことが、このような自然観を前提にした討論を可能にしたといえよう。最後に、長時間にわたる困難な同時通訳を引き受けてくださいました。繁松美保さんとアイリーン・スミスさんに感謝の意を表明したい。



第二分科会報告

抑圧からの解放

——新しい社会と文化をつくる

内海 愛子

第二分科会の議論は、つぎのふたつに分けてすすめられた。(1) 抑圧からの解放、どこからの解放か、誰からの解放か、何からの解放か (2) 新しい社会を、文化を、どうつくっていくのか。

(1) で、各国の抑圧の現状をだしあい、認識の共有化をはかり(2) の議論につないでゆく方法をとった。

(1) では、インド、ネパール、バングラデシュ、日本、タイ、マレーシアなどの報告があいついだ。インドの女子労働者の顧問をしている弁護士は、法という名の権力の一方的行使を排除し、自発的な大衆の参加の必要性を強調した。

カースト制が強く残るインドでは、どの階層でも参加できるシステムをつくるのが様々な抑圧からの解放をから取る上で必要だという。

ネパールでは、君主制度による抑圧が強いことが報告された。選挙制度もあるが、実際の権力は国王の手に握

られている。帝国主義の抑圧・搾取は分かりやすいが、封建的搾取は分かりにくい。人びとの意識化により、その地位が脅かされることを恐れた権力者が何もしようとしなからである。

バングラデシュでも、識字率は二二%である。一九七一年に独立して以来、一五年間が軍事政権だった。民主主義はなく、議会になんにも期待できない。クーデタもよく起こるし、大学もしばしば閉鎖される。民衆の合意のないままに、農業近代化がはかられたため、いまでは六〇%の農民が土地なし農民となっている。

香港で、青年・労働者教育に携わる青年は、労働運動が老人に牛耳られていると指摘していた。

共産主義が非合法のタイでは、言論の自由も制限されており、出版を禁止・規制する法律が、二九〇種もある。一九七七年のクーデタの時には、裁判なしで処刑してもよいことになり七〇名以上のひとが処刑されたが、この中には二〇名の政治犯がいた。また、タイの国籍法では、タイ人の母からは国籍が継承できない

という女性差別がある。女性への経済的な抑圧も強く、女の組合への嫌がらせも起きている。未成年者の労働、児童の問題もある。

もう一人のタイからの参加者からは、抑圧といっても大きな抑圧―権力者による政治的抑圧・社会的抑圧―と小さな抑圧があると指摘した。その上で、アジアのどの

国にもある抑圧（共同体による抑圧、少数民族への抑圧、女・子供への抑圧）が、話合わねばならないとして、家父長制の下で商品のようにみなされている女と子供への差別を問題にした。

各国の抑圧状況の報告の間に、日本からの報告もあいついだ。日本の女性差別のほか学歴、職業、障害者、被差別部落、都市の農村への差別など、じつに差別が複雑にから見合っていることが、指摘された。なかでも女性差別が一番みえにくい。このことと関連して、農村のアジア人花嫁の問題がだされた。なぜ、女たちが農村の嫁にならないのか。女が権利に目覚めたこと、経済的自立ができるようになったことなどが理由としてあげられた。また、定住外国人にたいする差別も問題となった。在留や就職上の差別、指紋押捺、外国人登録などの問題が指摘され、（１）侵略の責任をとること、（２）定住の権利を保証することが今後の運動上の課題として具体的に提案された。

日本の女の状況とアジアの女たちのそれは、本質的に変わらない。そこで、両者の人間としての誇りを奪っている構造を議論すべきであるとも指摘された。性のモノ化、商品化の現実、近代社会、資本主義がもつ共通の抑圧構造であるからである。

女については、マレーシアからも報告が合った。同じ抑圧でも男とおんなではその受け方が違う。このことを

忘れると一般論に、話がなってしまう。労働運動のトツブはほとんど男だし、日常性のなかにつらぬかれている男中心の考え方にみられるように、家父長制があらゆる制度のなかに浸透している。基本的な議論の進め方は、女と男の問題を中心にすえるべきだ。これは、インドからも賛意を得ていたが、ここに子供の問題があらたにつけくわえられた。女が子供をいかに虐待しているのか。家庭をいかに支配しているのか。母親が子供を於て、夫と同じように外へでてしまったら、誰が子供に責任をもつか。新しい社会における母と子の関係が問題だとのインドの青年の発言が物議をかもしたりもした。

先住民族についての抑圧も報告された。土地が奪われるこの種の開発に、先住民が反対すると、反開発と言われる、また遅れているといわれてしまう。焼き畑は遅れている、換金作物を作れといわれるが、それは私たちにとって何の利益もない。土地は生命の根源である。先住民内部に女性差別もある。家事、水汲み、薪拾いなどは、母親の責任と言われ、男の兄弟たちはこのことをなかなか理解しようとしれない。男の兄弟の教育程度は高いが、教育が投資と考えられ、見返りが要求される。そのため男たちは外の仕事についてしまう。日本の先住民アイヌに対する倭人の差別・開発の問題の発言もあり、アイヌの権利を認めることの重要性が指摘された。

技術の使い方による抑圧、情報による新たな抑圧も、

二一世紀に於ける問題として考えなければならぬ。

各国の状況が違うので、論点がかならずしも一致したわけではないが、抑圧状況の報告がさらに続いた。第三世界の共通の体験として、マレーシアからの報告では、多国籍企業と協力して、国家がいかに搾取してきたのが事例を含み報告された。資本主義の成功者が開発の唯一の手法と言われている現状があるものの、民衆の側の代案は必ずしも明らかにされていない。問題は国家による価値観の操作による民衆の分断統治と弾圧政策にある。第三世界の国々では人権侵害が日常茶飯となっている。

新しい社会をつくってゆくために、私たち民衆の価値観の創造を継続的に確認しあう組織が必要とされるのではないだろうか。私たちの歴史観を盛り込んだ民衆の教科書をつくる、民衆にとつての開発のあり方を示す、母親として生きる状況が抑圧的な現状を断ち切って、自己実現できる母親のあり方を求める。民衆が選びとる二一世紀を実現するためには私たちがどのように闘い、いかに生きるのかがポイントとなっている。二一世紀の隠された主役は子どもたちである。子どもたちの生き方に直接影響をもち家庭のあり方に特に注意が向けられねばならない。

資本主義と家父長制が結びついた現状では、階級闘争だけでは女性差別は解決してこなかったし、児童労働をも含めたこどもの抑圧も残されたままだ。家父長制から

の脱却は大きな問題だが、これは女の運動だけで実現するものではなく、男自身がどう闘うのか、男の権威に男が闘う、男自身が少数者になる生き方が求められている。男のあり方がいかに変わるのかを含めた女性・子どもの解放の方向性を問い続けてゆくべきではないのか。

各国の抑圧状況によって解放への道筋もまた多様であるが、現在、多国籍企業と国家によって進められている開発、家父長制の下での女性・子どもへの抑圧、ますます拡大する性の商品化などの共通の課題に対する闘いの共有化が必要とされている。巨大技術と情報が国家と多国籍企業の手握られ、価値観が操作されているなかで、私たちのオルタナティブをつくるネットワーキングづくりだしてゆくなかから新たな可能性を産みだしてゆくことができるだろう。

第三分科会報告

強者の支配をくずす

——国家を変える、国際関係を変える

菅 孝行

他の分科会でも多少そういう傾向はあったかと思うが、第三分科会の場合、日本など先進国の側の自己分析や闊い展望の呈示に欠けるところがあったと思う。アジア第三世界の人々の発言と「先進国」サイドからの視点が均衡し、そこから世界大のヴィジョンと個別の闊い展望が拓かれる、というのがもつともぞましいあり方だといえようが、後者の影が薄かったことは否定できない。それはひとえに、日本をはじめ、「先進国」で強者の支配を崩す闘いに関与している団体、個人の参加が少なく、多様な視点から分析を加え、アジア、第三世界の人々の新たな視野を拓くだけの内容を提示しえなかったことによるだろう。そもそも、闊いそのものの脆弱さや思想・理論の深化の不足にも起因することであろうが、水俣会議への結果が十分図れなかった点も今後の反省材料ではなからうか。

討論は、いくつかの基軸をめぐる、往復し、展開し、交錯しつつ進行した。第一の論点は政治における強者の支配をめぐるものである。多国籍企業の利益にもとづく大国の政治戦略によって、自らの生存、生活、文化をおびやかされている無数の人々が存在することが指摘され、人種、性、宗教、習俗、文化、身分、職業、障害の有無などによって差別されることなく生きる権利を全世界の民衆がもっていること、それらの権利を獲得するために闘うことが、多くの地域の人々によって主張された。

第二に、これと一体のものとして、経済における強者の支配について批判が集中した。ODAをはじめとする「援助」という名の掠奪をやめさせ、地域住民の経済的な自立を基礎とする、連帯を原理とした世界を創造する権利を全民衆のものとするのが主張された。

第三に、軍事問題について、大国の暴力による支配はもちろんのこと、一切の国家権力による民衆の殺戮、投獄、人権侵略の一切に対して、ただちにこれをやめさせるべきであるとの発言が、各地域で闘う人々からなされるべきであるとの発言が、それぞれの闊いと生活の場での民衆の行動の発展が基礎にされなければならないことが強調された。直接の力による支配の最高形態は軍隊であるから、強者の支配を崩すには、軍事力の支配の解体こそが不可欠とされるのは当然であろう。

第四に、強者の支配を正当化するイデオロギーへの批判に論議が集中した。その最たるものが、「民主主義」である。帝国主義者のふりかざす「民主主義」イデオロギーには熾烈な批判が多くの人々によって加えられた。

「民主主義」をはじめとする強者の大義名分は今、国家や大資本の犯罪を正しいもののように人々に信じ込ませたり、現状の不正をあきらめを以つてうけいれるべきだと信じ込ませ、一切の抑圧を飾りたてる役割を果たしている。政府のイデオロギー政策のみならず、その手先になり下がった教育機関、マスメディア、一部宗教団体に対しても闘わねばならぬことが主張された。また、単に批判にとどまることなく、民衆自身の手で、個の差異、人種、文化の差異によって差別され抑圧されることのない人間の尊厳の確立に寄与する、文字通り民主主義的な教育、メディアの創造こそが急務であることも強調された。

第五に、以上のような現状認識と展望のなかで、世界の支配構造における先進国のもつ規定力の決定的な大きさを認識し、政治・経済・軍事の中枢に対して全世界の民衆が共同して闘うことの必要性が確認された。また先進国の民衆は、自国の権力との闘いこそが世界の民衆の解放の必要条件であるという事実にあらためて直面せざるをえなかった。

第六に、「社会主義」圏で進行する事態、とりわけペ

レストロイカを注意深く見守り、冷静に分析を加え、いかにして「社会主義」圏の民衆との連帯をちとつてゆくかが重要な課題であることが指摘された。

第七に、今日の世界の抑圧の国際的な構造は、南北問題を基軸にした、人間の破壊、人間と人間の関係の破壊であるが、事態はそれにとどまらず、自然と人間の関係の破壊、自然そのものの破壊にまで及んでいること、このような破壊をおしとどめ、自然をとり戻すこともまた、強者の支配を崩すことによつてはじめて可能となること、何人もの発言によつて示唆された。

第八に、これら一切を通じていえることは、強者の支配とは、経済的強者の利害を背景とする肥大した国家と、国家の同盟による支配のことであり、究極的には、国家の廃止こそ強者の支配を終わらせる条件となる、ということが、ゆるやかな形であれ合意されたといえるだろう。もちろん、世界の民衆は今、それぞれの生きる場で、個々に、国家とさまざまな関係をむすんでいる。そのため、国家に対してどういう態度をとるかについては、いくつものちがった立場がある。だが、民衆が国家、国境を超え、いずれその存在そのものをなくしてゆくことによつてのみ、強者の支配を終わらせることができるという点では、おそらく反対の参加者はいなかったのではないかと思う。

会議を通じて、浮き彫りにされたのは「民主主義」「国家」という用語についての人々の反応の二面性である。「民主主義」については、とくに「民主主義」イデオロギーの名による暴力と闘っている人々から、激しい反撥の声があがった。反面、民衆が実現すべき世界のありかたのキイワードとしても、民主主義が用いられたし、論理的には誰もそれに反対ではないのだ。このことは、いかに「民主主義」が、支配のイデオロギーとして全世界的に手垢にまみれてしまっているかを我々に教える。

「国家」については、先住民代表及び「先進国」の参加者は、ためらわず廃絶の対象として扱おうとした。しかし、「国家」を大国への抵抗の拠点たらしめようとしている国々の人々は、国家の性格に多様性があることを指摘した。究極のイメージは共有できても、短い時間の具体的な問題について、今後、「国家」へのスタンスのちがいは、難関でありつづけるのではなからうか。

政治を基軸に論じ合った分科会で、自然と人間の関係が、大きなテーマとなったことは今日の「強者の支配」の性格を、明らかにするものであったといえよう。これは、全世界的に共有できる、いや、せざるをえないテーマであり、「国家」をめぐる若干の軋轢とは趣を異にした。(もちろん、立入ってゆけば、この点についても地域間の深刻な矛盾は存在するのだが……)

モラレス、北沢両氏の司会のもとに行われたこの分科

会は、討論が多岐にわたったとはいえ、テーマの性格上ある程度のがしぼれ、また、神奈川会議の参加者も何人かいて、その発展として論議できたこともあって、この種の会議にありがちな散漫さからは救われていたといえよう。

問題は、どう、議論を物質力にかえてゆくかである。

第四分科会報告

経済をとりもどす

—モノとモノの関係からひととひととの関係へ

大野 和興

第四分科会への海外参加者は、アジア・太平洋地域を中心にアメリカ合州国、EC（オランダ）と広い範囲にわたっていた。そのため、議論も各参加者のおかれた現実を反映して、きわめて多岐にわたった。

まず現実の世界をどうとらえるかということについて出された意見を整理すると、次のような点が指摘できる。

- ① 不均衡な発展をとげつつある。南の貧困と飢餓、北の過剰消費。
 - ② 多国籍資本によって支配されている。その場合のGATT、ODA、世界銀行などの役割に注目すべきである。
 - ③ 以上のような状況のなかで民衆が相互に隔てられ、分断されている。
 - ④ そうした多国籍資本の支配と不均衡な発展のもっとも犠牲になっているのは女性である。
- ①と②に関しては、例えば次のような発言があった。
- 「第一世界は物を無駄にしないキャンペーンをすべきで

ないか」（タイ）

「工業、とくに日本の過剰生産力をどうするかが問題。

経済大国日本が引き起こしている問題として、国際的な経済摩擦、不均衡の拡大、環境の破壊、資源収奪、そうした経済が生み出す人間の破壊—会社人間、教育・地域・家庭の破壊—などがある」（日本）

「矛盾は先進資本主義国どうしにもある。アメリカに進出した日本の自動車産業は全米自動車労組を拒否している」（アメリカ）

「いま世界の農民にとってもっとも危険なことのひとつに、GATTにおける決定のプロセスがある。GATTは農産物の自由化を進めようとしている。このことが実施されたら世界中の農産物価格は低落し、農民は生産の増大で対処せざるを得なくなる。その結果ますます農産物価格は下落、結局農民は解体し、農業はアグリビジネスにとってかわられることになってしまう」（オランダ）

また④の女性の問題については、例えば次のような発言があった。

「いま私たちは新しい経済体制とシステムをつくらなければならぬときにきているが、それは人道的立場に基づいたものでなければならぬ。なぜなら、いまフィリピンでもっとも苦しんでいるのは女性だからだ」（フィリピン）

「開発の進展、近代が女性に与える力は大きい。女性は

開発の犠牲者となってきた。近代化のなかで女性は教育サービスから除外され、自分たちがどのような影響を受けるか知らされないできた」(タイ)

では、こうした現状にある経済を、どのようにして民衆の手にとりもどすか。さまざまな意見が出され、議論が行なわれたが、ここでは地域レベル、国家レベル、国際的な段階と三つに分け、それらの議論を整理してみた。

議論のなかでもっとも力点がおかれたのは地域からまずはじめなければならぬということであった。例えば次のような意見だ。

「自然と調和した経済をめざすべきだ。そのためには地域レベルの運動をつくりだし、積み上げていくことが重要ではないか」(スリランカ)

「長期的ゴールは現在の国際的関係をくつがえすことが必要だが、それに向かうにはローカルレベルのオルタナティブが不可欠である」(アメリカ)

では、地域レベルの積み上げとは具体的にどういうことか。さまざまな具体例が出た。

「フィリピンではいま包括的農地改革法が国会で成立したが、この法律は土地のない農民に土地を与えるものではなく、金を払える企業に土地が蓄積されてしまう仕組みになっている。これに対してフィリピンの農民は、真の土地改革をめざして自分たち自身のプログラムを始め

ている。自分たちで土地を獲得自主耕作する運動だ」(フィリピン)

「いま私たちは市の住宅を貧困者用の住宅にする運動に取り組んでいる。またオルタナティブ・バンクをつくり、安い金利で貸し出す民衆の協同組合を始めた。ここでは女性たちの縫製生産協同組合への投資などを行なっている。私達は生産から流通まですべての過程に民衆自身がかかわることが大切だと考えている」

「開発と近代化に追いつめられるなかで、農民はなんらかの自分たちの方法を確立することが大切になっている。そこで複合農業の運動を始めた。米プラス自給農作物(豚、野菜、果実)という農業形態を村ぐるみでつくり、現金支出を減らし、さらに農業のコストもひきさげている」という運動だ」(タイ)

「日本は極度に集中化された社会だが、そのなかで民衆が自立するには地方の自立、地方自治が切り離せない問題としてあることが、運動のなかで次第にわかってきた」(日本)

こうした議論のなかで、地域レベルで「経済をとりもどす」手がかりとなる概念あるいはシステムとして次のようなものが浮かびあがってきた。民衆バンク、民衆交易、民衆自身による加工工場といった協同組合システムによる経済の創造、あるいは小規模・複合、自給、家族農業、村落農業といった開発や近代化、資本による農業

統合に対抗する農業の構築、などである。

こうした、いわばオルタナティブな経済を積みあげれば、経済はとりもどせるのか。次のような問答がかわされた。

「民衆バンクといっても、規模は小さいが資本主義的なものであることに変わりない。それがオルタナティブなものを生み出すものになりうるのか。例えば日本の生協運動は日本の社会をどの程度変えたのか」（韓国）

「地域レベルでの各種の取り組みだけで構造を変える力になるとは思わない。これらは未来に向けて民衆の経済をつくりだすための実験であり、このことに加え多国籍企業の巨大な力を抑える政治的アクションと、世界的な資本蓄積の循環を断ち切る戦略が当然必要になる」（日本）

そこで次に問題になるのか、国家レベル、地球レベルで何ができるのかということである。

まず国のレベルについていえば、フィリピンからは先述したように土地改革の重要性が指摘された。また日本の参加者から、主として日本における過剰生産・過剰消費の構造をどうすれば変えることができるかという提起がいくつあった。いいかえれば、日本の経済規模をいかに縮小していくかという課題である。そのカギを握るのは労働時間の短縮という指摘が何人かからあった。

「日本の労働者の労働時間は二一〇〇時間をこえ、長時

間労働をこなしているが、労働者のなかからは労働時間を短くしようという声が少ない。つまり、日本の労働者が自由時間をいかにすすかを含め新しい生活スタイルをつくることと併行しないと時短は実現しないことを、このことは示しており、それには当然価値観の問題がかわってくる」という意見だ。消費のあり方を含め、
「豊かさ」の意味が問われているということの指摘でもある。

以上のような地域、国レベルでの取り組みの上に、地球規模では何をやらなければならぬか。ここでは、多国籍企業の活動を抑えるための民衆どうしのネットワークの形成、労働運動の国際連帯と共同行動、GATTや世界銀行等へのタイ抗力の形成、ODAを出す国と受け入れる国との民衆の共同行動、といったことが指摘された。

さらに、こうした活動を通して資本蓄積の構造そのものにメスを入れなければならないということ、そのためには民衆どうしの資料・情報の交換を含むネットワーク形成の重要性が強調された。

国際連帯では、日本側に対しより具体的な提起もあった。女性を含むアジアからの出稼ぎ労働者の問題である。「フィリピンから日本への出稼ぎ労働者は、女性は娯楽産業に、男性は底辺労働者につき、人権を奪われ、賃金をピンハネされ、非合法の不安定な状態にある。いった

いこうした問題を日本人はどう見ているのか。日本側からも情報を出してほしいし、要求を出し合いたい」（フィリピン）

最後、地域、国、地球レベルのさまざまな取り組みを通じる大切な課題として、価値観の問題がだされた。

「新しい価値観に焦点をあてるのが、構造を変えるカギではないか」（ニュージーランド）

「日本の労働者が人間らしい生き方を探しだすことが、日本の経済を変えることにつながる」（日本）

「進歩とか開発にどういう考え方を対置するか。豊かさの再定義をする必要がある」（日本）

「女性に仕事を与えられ、人間の尊厳を失わない形で経済に参加できることが大切」（フィリピン）

「どのような開発と発展がアジア地域に必要なかを明らかにしなければならない」（タイ）



第五分科会報告

共同の未来へ

——民衆のたましい、民衆の連帯——

埴野佳子

1

「共同の未来へ——民衆の魂、民衆の連帯——果てしもなく大きな、意味深いタイトルのついた第五分科会に関しては、その二日ほど前からやや緊張感がただよつていたように思う。討論の柱をどうたてようかと、花崎さん中心に昼食をとりながら数人でまえて話し合ったりもした。なにしろ、五月、東京での第三回実行委員会の第五分科会で、それまで“オールタナティブ”ということばで語り合ってきたことに対して、水俣でいわれる“じゃなかしゃば”ということばはどうだろうと、皆の前に投げ出し、語り合っていたのだ。“じゃなかしゃば”——私達にとって共同の合言葉になったもので、P 21が生み出した大きな財産ともいえることばだ。——その“じゃなかしゃば”をもとめる民衆の魂・連帯について語ろう！期待感も大きかった。

2

三五名程の参加のもと、まず花崎さんが「討論の前提として……と、口火を切った。
・民衆にとつてもうひとつの社会Ⅱ“じゃなかしゃば”へ向うピープルのあり方について話したい。
・現在は、西欧中心の文明のあり方・その哲学が根底からゆれている時である。権力・富・地位・名声を得ること、他人を支配することを価値あるものとする考え方は別な新しい価値を民衆の中に発見したい。
・金ではなく、どういう生き方が尊厳ある生き方であるか、どういう仕事がいい仕事で人間らしい仕事なのか、調和の取れた仕事と休息のあり方を見出し、労働の実質をとりもどしたい。
・女と男の調和のある社会をつくるために、フェミニストの価値をきちんと認識したい。民衆にとっては何が美しく何がみにくいのか。
・民族グループの価値を認識したい。
・環境を大事にするという実利的考え方ではなく、敬愛に根ざした自然に対する態度とはどうあることか。
・宗教の解放的な役割について考えたい。
・連帯の基本としてのピープルネス、民族・国境を越えた民衆性について考えあいたい。

さらにダグラス・ラミス氏が補足した。

・二〇年前には「民衆の魂」について語る分科会が持てるとは考えられなかった。様々な運動の中でそれぞれ無関係であるものを民衆の魂を語ることでつなぎ合わせたい。個人的価値にどういふ変更をもたらすことによつて“じやなかしゃば”は実現できるのかを考え合いたい。



もともと魂について語ることは難しいことなのだ。会場の雰囲気は、崇高ななかみを語らねばならぬという思いで満たされたのか、当初はやや固かった。それをときほぐそうと、他己紹介しあうことを目的に、各々がまわりの人にスピリチュアリティということばで何を考え、何を語りたくてここにいるのかを聞きあうことに、一〇分間の時間をあてた。——ことばを通じ合わせることに、難しさとまどいながらも、自己紹介をしあうことで一〇分間が過ぎた。だが、この一〇分はとても大事なものであったようだ。その後「共同の未来」を語るのにふさわしいなごんだ空気の中で、隣りの人を紹介しつつ自らの思いを付け加えるというかたちで、「民衆の魂」をめぐ

って、次々と（声）が重ねられていった。

そのような中で、スピリチュアリティに對しまつすぐ向いあつた（声）は、先住民の立場からのものが多かった。いくつか紹介してみよう。

・インディアン、エド・バインスティックさんの（声）
・スピリチュアリティに重きを置くというのは、先住民にとつてはごく日常的なことであり、それは生き方そのものでさえある。我々がとりくむべきこととしては、先住民が参加できる世の中をつくりあげるといふことがある。

・北アメリカ、ハワイの先住民カワイブナさんの（声）
・スピリチュアリティを語るといふことと、宗教を語ることとは区別されるべきだろう。先ず何よりも大事なことは、お互いを認めあうことだ。我々民族は、公に分かち合うことを表わすことばとして、“アロハ”といふことばをもっているが、このことばの中に我々のスピリチュアリティは表明されていると思う。
また、次のような（声）も、それに加わつた。

・マオリの人は、自然に對する敬愛の念を常に持つており、木を切るにしても、木に對し、切つていいか、とたずねることからまず始めるし、自分たちにとつて必要な分しか切りはしない。自分達の文化が、いかに侵略者により侵略されようと、天・地を奪ふことはな

い。

4

このように主として先住民会議に参加した人達からの先住民族としてのスピリチュアリテイが語られたのに対し、フィリピン、インドからの参加者を中心にこんな（声）も付け加えられた。

いわば価値観の先達としての先住民のスピリチュアリテイについてはよくわかるが、現経済体制のもとで、第三世界の人など苦しい状況に置かれた人がその価値を体現していくには厳しいものがある。それらの人々と共に考えることを忘れてはならないだろう。政治犯として入獄中の人や、つらいところにいる人について思いを馳せることを忘れたくない。

5

また連帯とスピリチュアリテイの関係について、京都の谷口修太郎さんは、先住民会議に参加して気づいたこ

とだが、と語る。

・部落差別の問題に長年取り組んできたが、差別のあらわれ方は、どんな場合も似てくるんですね。それが、旗にあらわれている。黒、赤、黄から成るアポリジニの旗は、黒が大地で暗黒を表わし、赤は白人によって迫害され大地に流した血の色で、黄は太陽をあらわすといえます。同じ色によって成る東チモールの旗も黒は文盲を、赤は自然の中に流された血の色を、黄は自然を表わしよみがえりの色とされるそうです。そしてまた、部落差別に抗してたちあがった全国水平社の旗も、黒は暗黒を、赤いぼらは血の色なのですが、枯れずに存在しつづけ、生きつづけることを表わしています。このことから、人間の尊厳を守る人の魂は同一なものであり、だからそのことが連帯しうると考える根拠にもなると考えられます。そしてまた、フィリピンの司教ラバヤンさんは連帯の根底には共感があるという。

・「血は水より強し」というような関係の強さ、宗教間のちがいが、イデオロギーのちがいは、たしかに問題になるだろうが、各自のなかにあるスピリチュアリテイによって切りひらかれていくであろうし、それは共感できるということによって力になっていくであろう。

花崎さんも、先住民会議の閉会地、釧路湿原で、アイヌ

者で、自分にはアイヌの血は一滴も流れていない。しかし、そんなことは全く問題ではないのだ」と言い切った話を紹介し、やはり、共感が人と人を結びつける根底となると力をこめて言う。

⑤

こうして、(へ声)が重ねられていったのだが、さらに心に残る(へ声)を、二、三紹介しておこう。

水俣の砂田さんから、一九五六年に発病し、急性激症患者である田上義春さんの歩んできた道についての話がなされた。今、田上さんは、農園を見てもらえば彼の魂がすべてそこにあらわれていると言えるほどの動植物に対する思いの深さがあらわれている農園を維持し自らの身体にあわせながら、そして楽しみながら自給する農業を営んでいるという。——仕事に向う民衆の魂のあらわれを聞いたと思う。

また、東京から参加した渡辺勉さんは、自分にとってこの不知火海沿いに水俣病と共に忘れられないものに三池争議があるという。一五、〇〇〇人の労働者が一年半ストライキをし、一、五〇〇人が解雇され、失業し、三池爆発時には三六〇人死亡し、ガス中毒患者が三〇〇人

に達した。その中で忘れられないのは、その死んだ労働者である坑夫は、連帯・友情・博愛をあらわす三本の線の入ったヘルメットをかぶっていたことだと話す。——少数になったとしても苦しみの中から民衆の魂はほんものの連帯を求めるものなのだ、と。——この話が終わったとき日本の若い(二〇代)の女性の目に涙がいつぱいになっていたのを見た。

報告しておきたいことにはこんなこともある。愛知の日方ヒロコさんが、

・日本ではこの頃になってやっと男社会のひずみをしょうって女性が外へと出はじめた。

女はこれまでのたくさんのものをかぶっている。でも私達女がずっといたのだ、ということをよくよく心に置いてほしい、

と、フェミニズムの価値についての提起をしたこと、そして、それを受けて、先住民族の人からの

・先住民の間では、女が決定権をもっていた事柄がある。戦争をやるかやらないかを決める時だ。自らの夫、子どもを戦争で死に至らしめることになるのだから。

という(へ声)があった。——いい話しを聞いたなあという思いだった。

民衆の魂・連帯について落ち着いた雰囲気の中で、希望をこめたトーンの語り口がつづく中で、その希望を共有しながら、そのうえでなお、その希望に根拠を与えるためにこそ発せられたものがある。カナダ近くの小さな島から参加した先住民グロリア・ウエブスターさんの（声）は、心にとめるべきものだろう。

・スピリチュアリティを考えるとということは大変難しいことで、いわば鋭いナイフでできている世界の中の細い道を歩くようなものと言えるのではないでしょうか。一般化して語ることに対し、危惧の念を禁じられないのです。

希望をもつて、そして高らかに語ることはある。しかし、あまりに手放して、民衆の魂・連帯を語ることに対しては、私たちは慎み深くなければいけないだろうと考えさせられたのだった。

8

以上、長々と、第五分科会での（声）を紹介してきた。

これらの（声）は、必ずしも最初に提起された討論の柱にそったものではないし、それらを満たすものでもなかった。——進行役のまずさは、もちろんのことだとして——しかし、そのことは、これらの（声）が、互いに拡散しあっていたということではない。民衆の魂・連帯という核に向って、それぞれの（声）が、ことばを選び選びしながら、ゆつくりと、その身体を運ぶ、その波紋が次の（声）をゆつくりとひき出す、というようにあったのだと思う。このような国際的な会議で、分科会の一つとして設定されたこと自体が大きなことであつたらうし、また、ほとんど初めて、というように出会った者たちが、「希望の共有」に向って、民衆の魂・連帯について（声）をかわし合う——そのこと自体のうちに、私達は、民衆の魂・連帯の現在のあり方を感じとり合おうとしたのだつたと言える。そのことは、重ねあうことのなかで折にふれて発せられた（声）、また、最後に分科会の終わりにあたって確認しあつた次の（声）に示されている。

・このように集まっていることこそがスピリチュアリティのありかをはつきりと示しているのだ。ここにいっしょにすることがそのことだけでうれいことだ。

・先住民会議を経て一週間ばかり共にいる中で、随分と涙を流しやすくなった自分である。共に闘う人の思いが遂げられるようにといのり、そして共に涙し笑い歌

ってきた、このことがすなわち人々を結びつけるきず
なであろう。同じ志を持つ人々、闘う人々の仲間とし
て暮らしていきたいという思いが涙と笑いの中で、な
お強くなった。



「ここで会ったがきょうだい——誰かがふともらし
たへ声だ。水俣宣言に「：わたしたちの希望は空疎な
希望ではない。：この希望は、わたしたちを嘆かせ、時
には絶望に陥れる不正・邪悪・腐敗のただ中から生まれ
たのだ。：不正のみならず社会や人間や環境の崩壊とた
たかうようわたしたちを鼓舞してやまない希望だ。この
希望の基盤は存在するか否かを自らに問い正したので
ある。：」とうたわれている。私達はこの第五分科会で
この希望のありかを、民衆の魂・民衆の連帯を語る中で
実感し、そして「共同の未来へ」と向うみちすじを自ら
のものとして確かめたのだった。（進行役をしてい
たため、きちんと記録もとっておらず、かなり独断的な
まとめになっているかもしれない。指摘していただけれ
ばと思う。）

